

## 紹介

小島道裕著

### 『城と城下——近江戦国誌——』

本書は、学生の頃より近江をフィールドとして精力的に中世城館・城下町研究を進めて来られた著者がこれまで学会誌や報告書に発表された論稿を一書にまとめたものである。著者は以前、千田嘉博・前川要両氏とともに『城館調査ハンドブック』（新人物往来社、一九九三年）を著しているが、本書はその実践版、あるいは本書での実践がハンドブックに結実したとも言える。本書の構成は以下の通り。

はじめに

#### 第一章 城館趾・土豪・村落

1 中世城館の残り方

2 城館関係地名の地域性

3 城館趾と伝承

4 城館趾の調査(一)  
——土山町頓宮——

5 城館趾の調査(二)

——能登川町種村・垣見他——

6 城館趾の調査(三)

——野洲町北村・守山市矢鳥——

7 平地城館趾と寺院・村落

#### 第二章 城下町

1 観音寺城・石寺

2 小谷

3 上平寺

4 安土

#### 第三章 土豪たちの生涯

——野洲郡北村 木村氏の歴史——

1 「安土町奉行」木村次郎左衛門尉

2 「六角義堯」と木村筑後守

3 秀吉の朝鮮出兵と木村久綱

初出と成稿の経緯

あとがき

第一章では領主居館としての機能を終えた城館が神社や墓地、公有地、あるいは寺院へと転身し、また様々な伝承を生みだす母胎となることを調査で得られた豊富な事例をもとに紹介する。特に7節では近江では城館が真宗寺院化する事例が多いことに着目し、山門という権門寺院の支配下にあった在地領主が一向宗への改宗を契機に自

立を図るとの指摘がなされる。

第二章では戦国期近江の代表的な城下町である観音寺城・石寺(六角氏)、小谷(浅井氏)、上平寺(京極氏)、安土(織田氏)について、現地での聞き取りや地籍図調査を踏まえて城下を復元し、各城下の構造と特徴、各権力による城下整備の過程を明らかにする。

そして第三章では第二章4節でも関説された野洲郡北村の土豪木村氏に焦点をあて、戦国末から近世初頭にかけて活躍した重存・高重兄弟と重存の子久綱三人の生涯を辿ることにより、中近世移行期に一土豪の直面した社会変動とそれへの対応を描き出している。

中世城郭・城館研究は、「城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する」との村田修三氏の提言(『城跡調査と戦国史研究』日本史研究二二一、一九八〇年)以来、ここ二〇年で大きな進展をみたが、本書もこの視角を継承し近江をフィールドとして平地居館研究の具体的方法を提示したものである。城館研究の格好の手引書であり、また副題の示す通り中世後期から近世初頭に至る近江の歴史像を一段と豊

かなものとしたが、それ以上に近江という歴史的風土に対する著者の深い愛着がうかがわれる書である。

蛇足ながら、著者も参加され、本書に多くの素材を提供することとなった滋賀県中世城郭分布調査（一九八二―九二年）は、近年盛んに行われるようになった自治体による中世城郭調査の嚆矢として特筆されるべきものであり、その貴重な成果が広く公刊されたことは喜ばしいことであるが、一方では全国で多くの城郭・城館趾が開発等による破壊の危機にさらされていることを忘れてはならないだろう。

（A5判 二四六頁 一九九七年五月）

新人物往来社 三〇〇〇円）

（野田泰三 京都大学研修員）

## 会 告

平成九年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日（日）午後一時より京大会館において開催されました。

公開講演は鈴木利章、永田英正の両氏により左記の演題で行なわれ、盛会裡に終わりました。

現代において

歴史学は可能か

鈴木利章氏

出土資料による

漢代史研究の新展開

永田英正氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成九年度会務報告がなされました。

平成九年度

史学研究会大会講演要旨

現代において歴史学は可能か

鈴木利章

報告者の史学思想史への関心は、越智京大名誉教授との共訳『ウィック史観批判』の分担章「歴史と価値判断」を訳したことに始まる。この原著者H・バタフィールドは、歴史研究に価値判断を入れることを厳しく批判しており、まさしく正統派歴史学の立場に立っていた。この立場は、同じくH・バタフィールドによれば、一八世紀後半のゲッチングン学派にまで遡るが、象徴的には、L・v・ランケの、一八二四年十月『ローマ風ゲルマン風諸民族史』の出版にはじまるとする。ランケは、この書の序言で、無私で、厳密なる史料批判を駆使することが、歴史学が学として成り立ちうる大前提であるとし、それを *Wissenschaftlich gewesen* と表現した。かれは、その文言の直前で、「人は歴史に、過去を裁き、未来に役立たしめるために同時代を教へるといふ任務を興へてゐるが、現在の